

# ふるさとの 植物を守ろう

No. 13 February 2014

植物園と市民で進める  
植物多様性保全ニュース

Japan Association of Botanical Gardens  
公益社団法人日本植物園協会

## 奄美大島絶滅危惧種調査報告

京都府立植物園 長澤 淳一

奄美大島湯湾岳周辺を中心に絶滅危惧種の調査を行ったので報告します。なお地名表記に当たっては、絶滅危惧植物の情報の取り扱いに関するガイドラインに従い県名までとしました。

1, 日時：2012年11月26日～29日

2, 調査者

調査：長澤 淳一（京都府立植物園）

案内：前田 芳之（奄美大島在住，植物研究者）

同行：瀬戸口 浩章（京都大学 大学院教授）

3, 調査地点の概要

① SITE 1：鹿児島県

稜線沿いの岩場にアマミイワウチワ、カゲロウラン、カゴメラン、ミヤビカンアオイなどが自生。

② SITE 2：鹿児島県

林道沿い、小さな沢の傍の岩場にアマミイワウチワ、アツイタ、シマキクシノブが着生し、周辺にはミヤビカンアオイ、ウケユリ、アマミテンナンショウも自生。アマミイワウチワは盗難によって自生量が激減。

③ SITE 3：鹿児島県

林道から分かれる古い林道跡にカクチョウラン、エビネ類などが自生し、個体数が非常に多い。

④ SITE 4：鹿児島県

林道沿いの法面にアマミツタが自生。

⑤ SITE 5：鹿児島県

林道脇のやや湿った法面にホザキザクラが自生。

⑥ SITE 6：鹿児島県

5m以上もある林道法面上部にウケユリが自生。

⑦ SITE 7：鹿児島県

道路沿いの小さな沢、民家跡らしき場所の付近にアマミカジカエデ、ワダツミノキなどが自生？



アマミイワウチワ

⑦ SITE 8：鹿児島県

展望台から始まる登山道沿いにコブラン、タイワンアオネカツラ、アマミテンナンショウ、リュウキュウサギソウ、フジノカンアオイなどが自生。コブランはシマオオタニワタリの株元に着生。登山道のすぐ脇にあり、盗難の危険性がある。余談ですが、遺伝的にシマオオタニワタリと呼べるのは奄美と沖縄本島北部産だけで、貴重。

⑨ SITE 9：鹿児島県（省略）

⑩ SITE 10：鹿児島県（省略）

⑪ SITE 11：鹿児島県

海岸沿いの芝生広場にオオシマノジギク、アマミラッキョウ、オキナワチドリなどが自生。

4, 域外調査

① 鹿児島県森林技術総合センター龍郷町駐在

90年代に県の事業で民家に保存されている当地の絶滅危惧種を収集し、森林技術総合センターにアマミアセビ、タイワンツクバネウツギ、アマミヒイラギモチなどを保存。現在常駐職員がおらず、十分な管理ができなくなっている模様。

② 鹿児島県の民家

林業の仕事をしていた頃、アマミアセビとアマミヒイラギモチを採取して庭に植栽したそうです。生育地にほとんど自生がないアマミアセビ、アマミヒイラギモチ、タイワンツクバネウツギ、オキナワハイネズなどは島内の民家に結構残っているようです。



コブラン

報告

広島市植物公園のヤチシャジンの保全活動について.....

広島市植物公園 井上 尚子

広島市植物公園では、2008年3月に広島県世羅郡世羅町から町内に自生するヤチシャジン（環境省4次レッドリスト：絶滅危惧ⅠA類）を保全するための諸条件の調査を依頼されました。預かった種子から育てた苗を用いた生息域外における生育条件や形態的・生態的特徴の調査結果は、広島市植物公園栽培記録32号（2011）と33号（2012）及び日本植物園協会誌第47号（2013）に掲載しました。現在、広島県内のヤチシャジン自生地は4ヶ所確認されていますが、いずれの場所でも植生や水環境の変化によって生育状況が悪化しています。そこで2013年からは、生息域内での保全に必要な管理方法を明らかにするために、世羅町にあるせら夢公園と共同で、増殖した苗を試験的に植栽しました。

試験植栽地としたせら夢公園自然観察園は、ヤチシャジンの自生地がある世羅台地の多様な動植物を保全し、その観察や育成活動を通じて自然について学ぶことができる自然学習の場としてつくられた園で、アカマツを主体とした樹林地と、これに囲われて南側に開けた

細長い谷で構成されています。試験植栽地は、①柵田風に造成された湿地内の3ヶ所、②樹林地からの湧水が少量ある斜面で、周辺が開けた場所の1ヶ所、③樹林地からの湧水が多い斜面で自然林に近い場所の1ヶ所、の計5ヶ所です。ヤチシャジンは根域を冠水させてはいけなことが分かっていたので、①の柵田風の湿地では、地面を水面から5～10cmかさ上げして植栽しました。結果は、いずれの試験区域でもヤチシャジンは生育できたものの、一番生育がよかったのは、②の樹林地からの湧水が少量ある斜面で、周辺が開けた場所でした。柵田風の湿地では、根域が限られる上、日照りの時に地表近くが乾くので、生育が劣るようでした。また、樹林地からの湧水が多い斜面で自然林に近い場所では、草刈作業等のコントロールが難しかったことがあり、正確な結果は分かりませんでした。

今後は、今回の問題点を洗い出し、さらに植栽数を増やして、生育域内におけるヤチシャジン保全のための管理方法を明らかにしていく予定です。



写真1 せら夢公園自然観察園。柵田風に造成された湿地の景観。2013年6月撮影。



写真2 最も生育が良かった植栽地に植えつけたヤチシャジン(矢印)の状況。2013年6月撮影。

大阪府営浜寺公園『ばら庭園』で行っている多様性の保存について.....

大阪府営浜寺公園 ばら庭園 辻 正信

当園では日本に自生するバラ属12種4変種の系統保存をしています。現在重点的に行っているのは、日本固有種のタカネバラ (*Rosa nipponensis* Crep.) とサンショウバラ (*Rosa hirtura* (Regal) Nakai) です。サンショウバラは主に御坂山地（山梨県）、箱根山（神奈川県）、愛鷹連峰（静岡県）など富士山周辺のみ自生し小高木となるバラです。自生地が限られること、個体数が少ないことから絶滅危惧種Ⅱ類（VU）に指定されています。自生地では他の高木やササ類の影響を受けて世代更新が進んでいないと思われます。山梨県産については三つ峠、籠坂峠において採取済みで、今回は静岡県産の採取を愛鷹山山麓（標高880m）で計画し、4月に土地所有者の了解を受け6月6～7日に自生す

る個体の位置データと写真撮影を行いました。（図1～3、一部未調査）自生区域は東西250m×南北120mの扇状地のような地形で、植生はススキ群落の中にケ

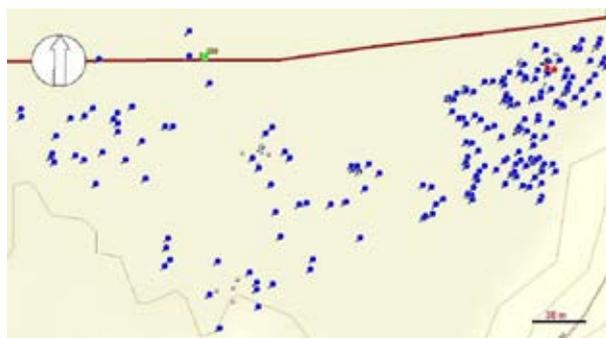


図1 サンショウバラの分布

ヤキなどの落葉広葉樹と混在しています。地質は玄武岩～安山岩溶岩の上にスコヤ、火山灰が薄く堆積しています。特筆すべきことは、狭い区域に当年の実生苗から樹高5m以上根元周り0.3～0.5m、6本立の古木まで250本以上の個体がまとまって自生していて系統保存には最適な群落と思われま

す。挿木用の穂木の採取と種子の採取を10月21～22日に実施して現在挿木と種子の整理をしています。今後、実生の生存率、種子散布の仕組みについて調査を



図2 サンショウバラ

行っていく予定です。

系統保全について思うことは、現地では温暖化によるササの侵入、人為的な原因、シカの食害などにより目に見えて生育状況が悪化しているのを実感します。しかし、本来の業務の合間を縫って調査を行うため、事前調査、許可申請、採取、その後の状況調査と何度も現地に赴く必要があり、なかなか思うように進まないのが実情です。



図3 自然の実生苗

## ラン科拠点園ミーティングを開きました

広島市植物公園 世羅 徹哉

日本産のラン科植物には413種があり、2012年に公表された環境省第4次レッドリストではこのうち200種が絶滅危惧種（カテゴリーEN, CR, VU）とされています。分類群ごとにみるとラン科絶滅危惧種の割合は群を抜いて多く、最も緊急に保護を必要としている植物群と言えます。このような日本の野生ランの保護・保全に力を入れている日本植物園協会のラン科拠点園には、国立科学博物館筑波実験植物園、環境省新宿御苑、京都府立植物園、大阪府立花の文化園（フルルガーデン）、広島市植物公園、高知県立牧野植物園、沖縄美ら島財団 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園の7施設があります（2013年度）。地域拠点園のようにたびたび連絡会議を開催することは困難ですが、2013年は6月と12月に会合を持つことができ、ラン科拠点園として協働することで効率的に日本の野生ランを域外保全する方法を話し合いました。

その結果、①収集・保存を効率的に行うために、ラン科拠点園が保有・保全している日本産ラン科植物（レッドリスト掲載種以外の種も含む）の情報を拠点園間で共有する（但し、これらの情報を拠点園外に提供することおよび保全目的以外に利用することは厳禁とする）。②危険分散の目的で、各施設が保有する種の余剰株を相互に分譲する。の2点をルール化しました。①については現在協会全体で行っている保有状況調査に先駆けてラン科植物だけの保有状況調査を行いま

した。これによると2013年11月末で、ラン科拠点園が保有している日本産ラン科植物は145種（全体の35%）でそのうち絶滅危惧種は84種（42%）でした。多くは生きた個体を栽培していますが、保有形態が種子だけのものも32種ありました。②の余剰株的分譲では、筑波実験植物園と大阪府立花の文化園からこれまでに約70種の野生種（外国産も含む）の無菌は種苗や緊急保護個体の提供があり、ラン科拠点を含む10施設が譲り受けています。以上に加え、現在行われている特性情報調査に対し積極的に情報提供を行うことになっています。また、現在のラン科拠点園が関東以



危険分散の目的で筑波実験植物園から分譲されたラン科植物の無菌は種苗：手前2鉢 キバナシユスラン属 (*Anoectochilus*), 左奥 キリシマエビネ (*Calanthe aristulifera* var. *kirishimensis*), 右 未順化のカンダヒメラン (*Crepidium kandae*)

西に偏っているので高山や冷温帯域に生育する種の保全を行いにくい。このような立地にある施設に対してラン科拠点園への加入を呼びかけることにしています。一方、保全目的であっても、生態系への影響が避けられない自生地からの採取の可否を判断するため

には様々な自生地の状況を知る必要があると考えられることから、研修の目的で自生地観察を行ってはどうかという提案があり、2014年度にラン科拠点園として1回目の自生地観察会を開催する方向で検討しています。

## 各活動の紹介

### ラン・ネットワークの紹介

ラン・ネットワーク 大貫一夫

ラン・ネットワークは、1997年に初代代表である信州大学理学部の井上健教授の提唱により、「日本のラン科植物の自生地における保全を図ること」を目的として設立された団体です。ほとんどの会員は、アマチュアのラン愛好家ですが、日本産ラン科植物の栽培・増殖技術に関しては、非常に高いレベルにあります。井上代表の当初の考えは、「その技術や経験をラン科植物の保全に活かしたい」というものでした。

残念ながら、井上代表は、2003年夏に学術調査で訪れたサハリンで、不慮の事故に因り亡くなりました。

後任の代表として、国立科学博物館植物研究部・筑波実験植物園の遊川知久博士を迎えています。

ラン・ネットワークはこれまでに、全国各地の自生地で様々な保全活動に関わってきましたが、多くの場合、依頼先との関係あるいはその他種々の事情に因り、なかなか活動の具体的内容を公開出来ません。唯一の例外は、1998年から独自の活動を行なっている都立井の頭恩賜公園におけるものです。そこでは、公園内の「御殿山」と呼ばれる雑木林の林床に自生する約10種のラン科植物の保護・調査研究・増殖の活動に取り組んでいます。その中にはマヤラン・サガミラン等の絶滅危惧種も含まれます。



キンランの人工授粉。国学院大学久我山高校生物部員に参加してもらっています。



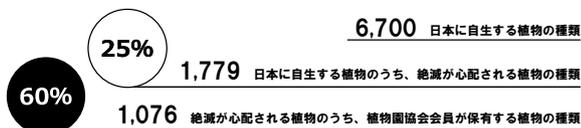
マヤランの播種試験。

## ふるさとの植物を守ろう



絶滅危惧植物  
Threatened Species

植物SOSマークの訴え



植物園協会の社会貢献活動の一例です。

このニュースレターが、植物とその保全に関する情報交換の場の一つとなるよう、工夫していきたいと思えます。各地の諸団体の取り組みもご紹介していきますので、共有したい情報やご意見等を、下記の協会事務局宛にお寄せください。よろしくお願いいたします。



編集・発行：公益社団法人日本植物園協会

〒114-0014 東京都北区田端 1-15-11-201  
TEL: 03-5685-1431 FAX: 03-5685-1453  
URL: <http://syokubutsuen-kyokai.jp/>  
E-mail: [seed@syokubutsuen-kyokai.jp](mailto:seed@syokubutsuen-kyokai.jp)

独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて制作しました